

韓国で開催された天文学に関する国際会議の報告

1992年11月2日～6日韓国 Yusong(ソウルよりバスで約3時間南へ、14m電波望遠鏡の設置されている韓国国立天文台の所在地)において Second Northeast-Asian Regional Meeting on Recent Development in Millimeter-Wave and Infrared Astronomy (第2回ミリ波赤外線天文学における近年の開発に関する北東アジア地域会議)と題する国際会議が開かれた。これは前回(1990年10月)中国黄山で行なわれた第1回会議を受けたものであり、私自身も引き続きの出席であった。今回の会議には韓国から66名、中国より14名、米国より3名、日本より14名、日本で研究している韓国人2名・中国人1名、米国で研究している韓国人1名の総勢87名、発表論文数57編の非常に盛況な研究会となった。特に今回の会議において目立ったことは、地元韓国から多数の(大学院生を含む)若い天文学者の参加・発表があり、その人数とアクティビティーには圧倒させられる感があった。そしてこのような盛り上がった雰囲気は2年前に行なわれた会議においては全く感じることができなかったものであった。

それでは2年前の我々の状況を振り返ってみると、日本においてはすばる計画がスタートしようとしていたところであった。同じころ韓国においては14mのミリ波電波望遠鏡が既に運用を開始しており、中国においてもやはり同じ14mの電波望遠鏡と2.1mの北京天文台がそれぞれ完成し、運用を始めていた。しかしながら前回の研究会は会議のオマケ(メイン)であった黄山踏破の印象のみが強く思い起こされるような気がする。しかしこの2年間で韓国の天文学会は大きく変身を遂げたようである(もちろんこの事は2年以上前から着実な進歩をしていたのであろうが、おそらく私にそのことを感じ取る事ができなかったであろう)。しかしこのことは韓国14m電波望遠鏡立



ち上げ時(約5年前)に滞在し韓国の人達と一緒に仕事をしたことがある林正彦さん(東京大学・天文学教室)の意見を聞いてみても、やはり当時の韓国においては素晴らしい電波望遠鏡ができ上がったにもかかわらず、大学院生や若い天文学者の中で電波天文学を希望するものがほとんど皆無であったという。しかし今ではどうであろう、非常に多くの元気溢れる大学院生が目輝かせながら電波観測を行なっている。そしてその若い力の勢いは現在の日本の若手天文学者に負けない(いやそれ以上かも知れない)ものを感じるものであった。但し韓国においては電波観測施設が14m望遠鏡一機に限られており、受信機感度の性能においても日本の観測所と比較して未だ少し劣るため単純な成果比較は難しいが、現在の状況においてとにかく精一杯やっているなという感を受けた。これは本当に歓迎すべき驚きであった。ただ個人的には赤外線天文学のグループが韓国に存在しないことがいささか残念ではあったが、これは韓国に未だ赤外線観測を行なう施設が皆無であることが主たる原因と考えられ、これも後ほど紹介するがその芽となる力強いプレッシャーは既に存在している。一方中国においては韓国ほどの盛り上がりは見せていないものの、着実な技術開発を進めており、既に可視光における補償光学(アダプティブ・オプティクス)などを実現させている。この会議の報告がいささか精神論的な側面に片寄っているが、とにかく私自身これほどに強い印象

を与えられた会議は初めての経験なのであり、この様な会議に参加できた私は本当に幸せであったと思う（さらに食べ物が非常に美味しかったことも幸せさを大いに拡大させた）。

今回の会議はこのように非常に盛況なものとなり最後のディスカッションの時間においても活発な議論が展開された。さらにそれを受けて会議の最後に韓国・中国・日本の今会議における代表者の署名の下に、地域会議としての決議声明が調印された。それらの内容を要約すると、韓国・中国・日本における各観測所の共同利用、継続的かつ密な情報交換、観測装置開発における協力体制の確立、天文学者の相互交流等である。もちろん声明の調印のみにより物事が進んでゆくわけではないと思うが、今回の会議に参加した人はこの声明が必ず実を伴うものになるであろうことを信じているだろう。またその一環として国際コンピュータネットワークを用いたe-mail連絡システムの構築や地域会議サーキュラーの発行などを日本からの参加メンバーが世話人となることを約束した。これらの完成により、国際的であるが身近な情報伝達・配付システムが確立できると期待する。

また最後に自分と最も関係の深い赤外線天文学に関して触れておくと、今会議においては赤外線に関する発表は残念ながら少ないものの、韓国・中国ともに赤外線カメラの装置開発及びそれを用いた観測には非常に強い感心を持っている事が感じられた。私自身赤外線カメラの開発とそれを用いた銀河中心観測の発表を行なったのだが、発表した夜には韓国の忠南大学の人たちに大学まで引っ張って行かれ、屋上にある光学望遠鏡を見学させて頂いた。さらに赤外線カメラについては夕食を食べながら、もう一度話をするチャンスを与えられ、かなり具体的なところまで議論を行なうことができた。この結果赤外線カメラに関しては共同開発に向けての協力を約束し、その実現に向けお互いの交流として韓国・中国から我々のグルー

プへの開発参加を行なうこととし、こちらからも必要に応じて両国へ訪れることを約束した。とにかく韓国の天文学者たちの熱意と迫力の前に私自身も可能な限りの協力を決意した。

韓国においては2年後には1.8mの光学赤外線望遠鏡が完成する予定である。この望遠鏡の完成は電波望遠鏡のもたらしたインパクトと同様に、韓国の光学赤外線天文学の分野にも大きなインパクトを与えるものとなるであろう。このような明るい状況を見るにつけ、平生楽天的な私ですら最近すばる計画という世界最高性能の望遠鏡の荷を我々は担って行くことができるのであろうかと、本当に心配してしまう今日このごろであったが、やはりもっと大いに楽天的になってもよいのではないかと期待させられたのであった。

第3回地域会議は約2年後に日本で行なわれることが決まった。次回の題名は未定であるが、Ground Based Astronomy（地上観測天文学）と言う事になるであろう。幅広い分野からの多数の参加、そして今回以上に盛り上がった会議となることを今から楽しみにしている。その実現のためにも本当に我々は日々頑張らねばならないと痛感させられる良い機会であったと思う。これを機会に北東アジアの天文学者が互いに力を合わせて、素晴らしい天文学の成果を生みだして行けるようになることを信じて、

上野宗孝（東大教養）